服飾文化共同研究報告 2010
共同研究番号 20003

江戸時代中期から後期の小袖に関する復元模作を通じた研究

A study through the restoration of kosode from the middle to the late Edo period

福島　雅子*[1]✢, 瀬藤　貴史✢, 林　智子*[2]✢
Masako Fukushima*[1]✢, Takashi Seto✢, and Tomoko Hayashi*[2]✢

＊1　横浜美術大学美術学部　神奈川県横浜市青葉区鴨志田町 1204
Faculty of Fine Arts, Yokohama College of Art and Design,
1204 Kamoshidacho, Yokohama-shi, Kanagawa-ken 227-0033, Japan
＊2　京都文化博物館
The Museum of Kyoto
✢服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract：The purpose of our study is to elucidate materials and technique of the production of the *kosode* of the latter Edo period and to restore *kosode* with material and the technology of present based on a result of the investigation. We investigated *kosode* of the latter Edo period and analyzed material and the techniques used for producing *kosode*. Based on the analysis, we selected two works and restored them. The reproduction went well generally. We elucidated the difference between technique and material for *kosode* of the Edo period and those of kimono today. To introduce our study to many people, we held exhibition in Portugal and Japan. We exhibited some test pieces of Yuzen dyeing and tools such as brushes for dyeing and a temporary line for ink. We also held workshop of drawing on *chirimen* (silk crape) with spiderwort ink. Many people enjoyed drawing and also understanding how Yuzen dyeing is done.

要旨：本研究の目的は、江戸時代中期から後期の小袖の素材と技法を調査し、それらの復元模作を通じて、当代の小袖の制作の実態を解明することである。さらに、研究成果を、広く一般に分かり易く公開することで、日本の伝統的染織技法の保存・継承の動きを喚起する一助となることを目指す。先ず平成 20 年度には、江戸時代中期から後期の小袖の調査を行い、調査結果を分析することにより、当代の服飾様式の特徴を顕著に表す 2 作例を復元模作の対象として選定した。次に平成 21～22 年度にわたり、現在入手可能な素材と、現在の日本の染織産業が有する技術を活かし、可能な限り対象作品に忠実な復元を行うことを目指した。復元模作工程は実施計画通り完了し、江戸時代中期から後期の小袖の素材と制作技法が、現代の着物の素材および制作技法とどのように異なるか等を明らかにすることができた。また、これらの研究成果を、広く一般に公開するため、ポルトガルの 2 都市と日本国内で展示発表を行った。会場では、復元模作と工程見本の展示およびポスターによる研究発表に加え、下絵（青花写し）と糸目糊置きのワークショップを実施し、日本の伝統的染織技法を効果的に紹介することができた。

＊2）t-hayashi@bunpaku.or.jp

配当決定額

平成 20 年度	500,000 円
平成 21 年度	1,330,000 円
平成 22 年度	1,100,000 円
合計	2,930,000 円

研究の目的

江戸時代の小袖に関する研究は、これまで作品や文献資料の検討を主流に進められてきたが、近年は、作品の復元を通じた新しい研究方法が試みられている。本研究は、江戸時代中期から後期の小袖に着目し、文化学園服飾博物館および東京芸術大学大学美術館が所蔵する当代の小袖に関して、復元模作を通じた研究を行うことにより、小袖の制作の実態を解明するとともに、大学等で染織工芸や文化財保存・修復技術を学ぶ学生に供することができる、現在一般に入手可能な原材料による今後も持続可能な古典的技法の明示を目指す。

先ず、上記 2 館および京都府立総合資料館所蔵の作品を中心に、江戸時代中期から後期の小袖の調査を行い、法量・染織技法・意匠・地質などの基礎データを収集し分析することにより、当代の服飾様式の特徴を顕著に表す復元模作の対象作例を選定する。さらに、作品や史料の分析によって得られた成果を基に、小袖 2 作例の復元模作を試みる。この過程で、実際に制作工程を再確認することにより、史料等の記述を検証し、江戸時代中期から後期の小袖制作の実態を解明することを目的とする。また、これらの研究成果を、広く一般に分かり易く公開することで、日本の伝統的染織技法の保存・継承の動きを喚起する一助となることを目指す。

研究の実施計画

【20 年度】

20 年度は、江戸時代中期から後期の小袖の調査と分析に重点を置き、下記の日程で調査を進める。

〔日程〕

平成 20 年 11～12 月　予備調査に関する調整および資料収集

平成 21 年 12～2 月　調査対象の下記 3 館において予備調査を実施

平成 21 年 2 ～3 月　予備調査の結果に基づいて、復元模作の対象作品を選定

〔内容〕

文化学園服飾博物館および東京芸術大学大学美術館、京都府立総合資料館が所蔵する江戸時代中期から後期の小袖について、法量・染織技法・意匠・地質などのデータを集積し、分析する。調査対象作品の中から、江戸時代中期から後期において各階層が用いた典型を示すと考えられる 2 作例を復元模作の対象として選定する。

①文化学園服飾博物館の小袖調査

江戸時代中期から後期の 7 作品（「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」他）を対象に調査を実施。

②東京芸術大学所蔵の小袖調査

江戸時代中期から後期の 5 作品（「水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖」他）を対象に調査を実施。

③京都府立総合資料館所蔵の小袖調査

江戸時代中期から後期の 10 作品余を対象に調査を実施。

【21 年度】

〔日程〕

平成 21 年 4 月ー5 月

21 年度の調査に関する調整、および 20 年度調査の分析を行う。生地製織を行う田勇機業株式会社（京都府京丹後市）の製織担当者および刺繍を担当する絲工房結衣（東京都目黒区）の日本刺繍技術者との復元工程の検討作業を進める。

平成 21 年 5 月中旬

復元の対象として選出した 2 作品について、田勇機業株式会社の生地製織担当者および生地解析の専門家、日本刺繍技術者を交え、地質・刺繍技法などについての詳細な再調査を実施。

平成 21 年 5 月下旬以降

復元模作の制作を開始する（以下、制作工程進行表参照）。復元模作は、小袖の意匠の中心である後身頃の部分復元を制作することとする。並行して、対象作品について継続して分析を行う。

	友禅工程	生地制作（田勇㈱）	刺繍工程（絲工房）	展示額制作	国内外展示計画
4 月		作品調査日　調整	絲工房結衣打合		
5 月	下図制作	作品調査 模作生地打合せ 生地設計	作品調査 刺繍作業打合せ	展示パネル設計	
6 月	友禅部分試作 部分下図制作 青花写し	生地製織		パネル木地発注 アルミ額縁発注	展示計画予定検討 （展示内容・展示面積）
7 月	友禅糊置き 彩色	生地製織		漆布張り	展示計画書作成 （展示内容・デザイン）
8 月	部分試作引き染め	生地精錬 模作用生地完成		漆箔作業	展示会場候補検討
9 月	生地青花入れ 友禅糊置き 彩色				展示会場選定（国内）
10 月	伏糊 地色引き染		刺繍作業		展示会場選定（海外）
11 月	地色引き染		刺繍作業		
12 月			刺繍作業		
1 月			刺繍作業		
2 月			刺繍作業		
3 月	作業予備期間		作業予備期間	作業予備期間	

〔内容〕

①20 年度に復元の対象として選出した 2 作品について、田勇機業株式会社および日本刺繍技術

者を交え、再調査を実施し、作品の組織解析および刺繍技法の分析等を行う。

②復元模作の生地を制作する。調査結果を基に、生地の設計ならびに製織を試みる。

③完成した生地に染色工程を行う。（共同研究員および友禅染工房應壽（京都府京都市）が担当）

④染色工程後、刺繍を行う。（絲工房結衣の日本刺繍技術者が担当）

⑤表装に用いるパネルの制作を行う。（共同研究員が担当）

⑥以上の①ー⑤の制作工程を、文字情報、画像データにより記録する。

⑦国内及び国外で展示発表を行うための会場を選定し、展示計画等について検討する。

【22 年度】

〔日程〕

平成 22 年　4 月ー　21 年度に引き続き調査研究および制作作業を継続

平成 22 年　7 月　文化学園服飾博物館所蔵「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」復元模作完成

平成 22 年　8 月 7 日ー14 日　ポルトガル（2 都市）における展示・研究成果発表

日本・ポルトガル修好 150 周年記念文化交流事業の一環として実施。第 1 会場はシントラ市・レガレイラ宮殿（8 月 11ー13 日）。第 2 会場はエヴォラ市・エヴォラ大聖堂（8 月 14 日）。

平成 22 年 11 月　文化ファッション研究機構における展示・研究成果発表

江戸時代の小袖復元に関する工程見本、復元作品、研究成果のポスターなどによる展示・研究成果発表。国内展示では、下絵（青花写し）と糸目糊置きのワークショップを実施。

平成 23 年 2 月　東京芸術大学大学美術館所蔵「水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖」復元模作完成

〔内容〕

平成 21 年度に引き続き、復元模作の制作作業を継続する。また、平成 20 年度、21 年度の調査結果の分析に基づき、江戸時代中期から後期にかけての小袖文化について考察を行う。これらの復元模作を通じた研究の成果をまとめ、国内外において、工程見本などとともに一般にも分りやすく展示・発表し、友禅染技法に関するワークショップも併せて実施する。このように、江戸時代中期から後期の小袖制作の実態について判明した成果を、広く国内外に発信することで、日本の伝統的服飾文化の発展の一助となることを目指す。

研究の成果

江戸時代中期頃より盛行した友禅染は、町人女性の小袖の中で多様な展開を遂げながら糸目糊置きの防染技術を発展させた。一方、武家女性の小袖においては、糸目糊置きの防染技法を用いながら、江戸時代後期頃より、いわゆる御所解模様と呼ばれる特徴的な意匠形式が生み出される。本研究では、20 年度に実施した文化学園服飾博物館および東京芸術大学大学美術館、京都府立総合資料館所蔵の作品調査と分析の結果を基に、江戸時代中期から後期において各階層が用いた典型を示すと考えられる以下の 2 作例を復元模作の対象とし、21 年度より 22 年度にかけて復元模作を通じた研究を行った。

①文化学園服飾博物館所蔵「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」

②東京芸術大学所蔵「水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖」

また、本研究では、産学連携による研究の意義を重要視し、現在の日本染織業界における企業および技術者と連携・共同することで、研究の成果を共有することも目指した。以下に、各復元模作制作工程における、研究の過程と成果をまとめる。

【文化学園服飾博物館所蔵「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」復元模作】

（1）復元模作対象作例について

文化学園服飾博物館所蔵「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」（図1）は、江戸時代後期の武家女性が用いた小袖の典型を示す作例として復元模作の対象に選定した。現在は縮緬地が引き解きの状態で裏地はなく、法量は身丈 159cm、裄 64.5cm、袖丈 44.5cm である。全体に満開の桜樹のなか、瀑布の流れ落ちる滝壷に舞い踊るがごとく浮かぶ鼓が表される意匠は、能楽「鼓の滝」の意匠化と考えられる[1]。脇能物の「鼓の滝」は、帝に仕える臣下が宣旨により山々の花の名所めぐるうちに、摂津の国の鼓の滝で木こりに姿を変えた山神に会い、奇特の舞を見るという内容であり、この「鼓の滝」の意匠化は、シルク博物館所蔵「浅葱縮緬地桜滝に鼓模様染繍振袖」や国立歴史民俗博物館「鼓滝模様振袖」など、江戸時代後期の作例に類例を見出すことができる。このように、能などの一節を暗示するような意匠は、江戸時代後期頃より武家女性が用いたいわゆる「御所解模様」の典型であり、糸目糊置きによる白上げと手の込んだ刺繍による加飾も、「御所解模様」を表現する典型的な技法といえる。

図 1　浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖

（2）生地の制作

復元模作の生地は、田勇機業株式会社が設計と製織を担当した。製織にあたっては、現在国内で入手可能な蚕種の糸を用いて、対象とする江戸時代中期から後期の文化財の生地に最も近い特徴を持つ生地を得ること目指した。そのため、生地組織分析の専門家として京都府織物・機械金属振興センター石田幸治郎技術幹の協力を得て、製織担当者および共同研究員による復元対象作品の生地の調査を行った結果、対象作品に用いられた糸は、現代の絹糸よりも細く、繊度むらが大きいこと等がわかった。

本調査結果を基に、以下のような生地設計を採用した。生地は、二越の縮緬である。経糸は、21 中単糸を 4 本合糸した糸を使用する。総合繊度にして 84 デニールにあたる。撚りは、1m あたり 100 回の S 撚り。経糸数は 2096 本である。これは、現在、同機業で通常に製織する縮緬の経糸数の範囲内である。現在同機業で製織する縮緬には、26ー28 中単糸を 4 本合糸し、経糸として使用しているが、この縮緬の経糸は約 75ー80%の太さということになる。緯糸は、八丁撚糸による強撚糸である。26 中単糸を 6 本合糸した生糸（総合繊度 156 デニール）に、1m あたり 2760 回の撚りをかける。撚り戻り率は 30%である。緯煮は 30 分行う。復元模作対象作品の生地と同じく、S 撚りと Z 撚りの糸を 2 本ずつ交互に打ち込む。

織り上がりは、長さ 14.2m、幅 45.0 ㎝、重量は 680g である。精練は丹後織物工業組合中央加工場（京都府京丹後市）で行う。練減は 82.3%と設定し、精練後の仕上がりは、長さ 14.12m、幅 38.62 ㎝、重量 560g となる。これも、現在の縮緬地が着尺1反あたり700gー800g 前後であることと比べると、重量にして約 70ー80%とかなり軽量であることがわかる。

(3)染色・加飾工程

下絵、糸目糊置き、色挿し、引染などの染色工程は、共同研究員の瀬藤貴史が行い、刺繍は絲工房

結衣の日本刺繍技術者である佐藤典子氏が担当した。加飾は以下の工程で行った。

下絵（青花写し）→糸目糊置き→水地入れ→地入れ→地染→水元→刺繍

(3)－1 下絵

実寸画を和紙に写しとり、さらに乱れ（皺や縫い合せの部分など）を修正した下絵をおこす。下絵を、青花（露草の花からとった汁）で生地に写しとっていく（図 2）。

図 2　下絵（青花写し）

(3)－2 糸目糊置き

糸目糊置きには、もち米と糠に石灰と蘇芳を加えた伝統的な糊を使用する。寒梅粉（かんばいこ）（もち米をもちにして細かく擂り潰した餅粉）を使用し、糠と塩を混ぜ合わせ、石灰と蘇芳を加えて赤糸目にする。配合比率は、寒梅粉：糠：塩＝8：2：0.5～0.8。塩の量は季節、湿度により変える。現在の友禅染はゴム糸目も使用しており、亜鉛末（金属亜鉛の粉末）を入れたもち米糊を使用することもある。江戸時代に行われていた技法に最も近い糊を想定し、上記の素材を採用した。

(3)－3 水地入れ・地入れ

糊を生地に定着させるために、水による地入れを行い、また色を定着させ滲みを抑えるため、豆汁を引く。豆汁という一種の不純物が生地に付着することにより、色の吸収を穏やかにし、色がより均一に定着する。豆汁は空気に触れることで不溶解性に変化し、水洗にも耐えられる状態となる。地入れ用の刷毛で、生地の表面に豆汁を塗り、刷毛に残った豆汁で裏面に空刷毛をかける。

(3)－4 地染

細緻な糸目糊置きによる防染技法が用いられる友禅染や御所解模様の白上げでは、地染は通常引き染めによる。しかし、本復元模作対象作品は、藍の淡色である浅葱色であり、藍染は通常浸染となる。本研究では、藍による引き染めの可能性を検討し、以下のような実験を行った。復元模作については、展示および教育普及活動への効果を考慮し、現在一般に使用されている酸性染料による地染を行う。

〔藍による引き染め実験〕

①生葉による引き染め（平成 22 年 9 月実施）

刈り取った藍の生葉 300g に水 300cc を加えミキサーで粉砕し、さらに水 200cc を徐々に加えながら、細かく粉砕する。こし布で葉の部分と液体を分ける。漉した染液にふのり 30g を加え、引き染を行う。その結果、葉緑素が多く含まれるためか、緑の強い青磁のような色味となった。（図 3）

図 3 生葉による引き染め

②還元建による染液の引き染め

藍の干葉 50g を水 1ℓ で煎じ、余分となる葉緑素、汚れなどを除去する（80ー90℃で 10 分間）。漉し布で漉し、煎じた液は捨てる。煎じた干葉を 60℃のお湯 1500cc、ソーダ灰 7g、ハイドロ 7g の分量で加熱しながら沸騰させずに 15 分間煮る。10 分程放置して温度を冷まし、漉し布で漉す。この作業を再度おこない、合計 3ℓ の染液とする。引き染めにあたっては、浸染とは違い、刷毛内での空気酸化を考慮

して、生地をアルカリ性にし、生地上で少しでも還元させるため、あらかじめ木灰の灰汁を引く事を試みる。染液の温度が下がると還元作用が弱くなるため、染液の温度を 40℃ー50℃で調節しつつ引き染を行う。その結果、色の方向性は、生葉を直接使用した場合に比べより復元模作対象作品に近づき、少しグレーを含んだ雑味の無い浅葱色が染出された（図 4）。

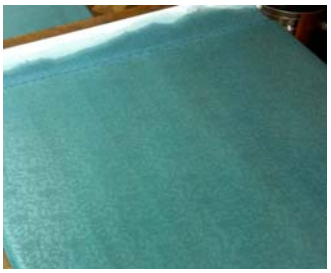

図 4 還元建による引き染め

(3)－5 水元

糊を洗い落すため、流水を使用し生地を洗う。

(3)－6 描絵

白上げにした桜花の中心に、顔料化させた藍（藍棒）を用いて、筆で花芯を描き込む（図 5 参照）。

図 5　復元模作（部分）

(3)－7 刺繍

刺繍は、日本刺繍技術者である佐藤典子氏が担当した。下絵を胡粉で写し取り、生地を刺繍台に張り刺していく。桜花の花弁は、釜糸（12 菅）2 本半を縒りをかけずに使用し、平繍で中心に向かって糸を渡す。花芯は白色の 6 菅の糸を 12～16 回渡した。実際に桜花部分の刺繍工程を進めると、花弁に用いた縒りをかけない糸のたわみを、花芯の糸を刺すことにより押さえて落ち着かせる役割をしていることがわかった。

鼓の革の部分は、金色の釜糸 3 本と 3 本を固く縒り合わせた糸を使用し、本駒繍で中心から刺し始める。途中に入る黒色の糸は、釜糸 5 本と 1 本のボロ縒りを用い、鼓の革部分の平面に段差が生じないように工夫した（図 5 参照）。

鼓の調緒（図 5 参照）の部分は、現在の日本刺繍ではあまりみられない技法であり、作品調査の結果などを基に糸縒りを工夫した。先ず、釜糸 3 本と 3 本を固く右縒りにして 2 本作り、その 2 本を左に軽く縒りをかける。次に、釜糸 3 本と 3 本を固く左縒りにして 2 本作り、その 2 本を右に軽く縒りをかける。前者の左縒りの糸 2 本の間に、後者の右よりの糸 1 本を挟み込む形で、止め糸がみえないように 4 菅合わせの糸で止めていった。一見して判別するのが困難な技法が用いられており、実際の鼓の調緒の質感を再現するため、糸縒りには手の込んだ工夫がなされていることがわかる。

図 6
浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖
復元部分模作（全図）

(4)装丁

復元模作工程の完成（図 6）後に、展示のための金箔と漆による表装を行う。

【東京芸術大学大学美術館所蔵「水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖」復元模作】

（1）復元模作対象作品について

対象作品（図 7）は、町人の小袖の様式の典型を示す作例として復元模作の対象に選択された。法量は、身丈 160.5cm、裄 68.0cm、袖丈 95.0cm である。若い女性の振袖として標準的な法量であるといえる。

本作は、江戸時代中期から後期に、富裕な町人の娘に使用されたと考えられる振袖である。意匠は、裾から立ち上がった柳の木がのびやかに枝を広げ、その上に檜扇が散らされているというものである。檜扇のモチーフは、王朝生活を連想させるモチーフとしてまず武家の小袖に取り入れられ、ついで富裕な町人の小袖に取り入れられたと考えられる。

図 7 水浅葱地綸子柳に扇文振袖（前面）

生地は、淡い浅葱色の綸子である。地組織は縦 4 枚綾、裏組織で二重蔓牡丹唐草を織り出している。地紋は、丈 27mm、幅 61mm である。

加飾技法には、友禅染、絞り染、刺繍を用いている。友禅染で柳と檜扇があらわされる。檜扇の各橋にも、蓮華唐草や菊唐草に類似した模様、変わり亀甲模様などが細かく描かれる（図 8）。檜扇の一部は匹田絞で表される。檜扇の輪郭と緒は刺繍で表され、匹田絞による檜扇の輪郭を整えるために効果的に使用されている。

同（背面）

背面の意匠に注目すると、左腰部分に余白があり、寛文小袖の形式がみてとれる。しかし、寛文期前後にはまだ友禅染はこれほど発達しておらず、95cm の長大な袖丈なども勘案すると、友禅染が技法的な完成をみた江戸時代中期以降に、寛文小袖の流れを継承しつつ制作されたものと考えられる。

図 8　同（背面拡大）

（2）生地の製織について

復元模作に用いる綸子の製織においては、可能な限り対象作品の綸子に近い地質を表現し、地紋の大きさについても可能な限り近づけることを目指して生地の設計を行った（設計の詳細は「服飾文化共同研究報告 2009」を参照）。採用された設計に基づき、有限会社アートグラフィック・タダ（京都府与謝郡与謝野町）が紋紙を作成し、田勇機業株式会社がジャカード織機で製織した。織りあがった綸子（図 9）の地紋は、丈約 30mm 幅約 61mm となった。復元対象作品の生地の地紋の大きさに比して、地紋の丈は 10%、幅は 5%大きいことになる。現代の絹糸と織機を使用する場合、対象作品の地紋の大きさとの差を、これ以下にすることは難しいということがわかった。

図 9　復元模作生地

（3）加飾

加飾については、可能な限り、対象作品と近い技法、つまり友禅染め、鹿の子絞り、刺繍を用いることとした。 加飾の計画にあたっての課題は、友禅染と絞り染のどちらを先に行うかという点であった。対

象作品の友禅染と絞り染の接する部分を観察したところ、絞り染の染料が、友禅染の染料の上にのっていることが確認できる（図10）。したがって、友禅染を先に行い、絞り染を後で行ったことが考えられる。しかし、この手順は非常にリスクが高い。なぜなら、絞り染に際して括りを行うことで、その前に行った友禅染が乱れる可能性が生じるからである（制作者はこれを「染料が動く」と表現する）。今回の復元にあたっては、より制作に適した手順を選択し、先に絞り染を行い、その後友禅染を行った。

図 10 水浅葱地綸子
柳に扇文振袖（部分拡大）

（3）－1 絞り染

復元対象作品における絞り染の用法は、次の通りである。まず、檜扇の形を括り、内側に匹田絞りで橋（檜扇のそれぞれの板の名称）の輪郭を染出する。檜扇の橋の輪郭を匹田絞の粒で表す部分と、粒の間に残した線で橋の輪郭を表現する部分がみられる。

復元模作の匹田絞には、本匹田を使用した（図 11）。本匹田は、粒の部分を指でつまみ、絹糸でひと粒あたり 10 回巻いて防染するという技法である。本匹田に近い効果を得られる技法としては針匹田がある。針匹田は、粒の中央を針のついた器具に掛け、太い木綿糸でひと粒あたり 4 回巻いて防染するという技法である。絞り染の工程に先立ち、両技法比較のため、工程見本を本匹田（図 12）および針匹田（図 13）について制作した。その結果、本匹田のほうが、粒の中央の部分が小さく仕上がっていることがわかった。本匹田のほうが、粒の中央の部分が小さく仕上がることから、対象作品により近い効果が得られると考えられるため、復元模作の絞り染工程においては本匹田を選択することとした。

図 11 復元模作（絞り工程）

図 12　本匹田（工程見本）

図 13　針匹田（工程見本）

（3）－2　友禅染

友禅染は、友禅染工房應壽（京都府京都市）が行った。前述の「浅葱縮緬地鼓に瀧模様振袖」の復元における染色工程に、さらに下記のような手順で色挿しと伏せ糊を加える。材料には、現在手描き友禅で使用されるゴム糸目糊と酸性染料を使用した。復元模作のために製織された生地の綸子については、地入れなどによる大きな縮みは見られず、染色工程は順調に進行した。

〔友禅染工程〕

下絵（青花写し）→糸目糊置き→地入れ→色挿し→伏せ糊→地染→水元

（3）－3 刺繍

刺繍は、日本刺繍技術者の高須好子氏が担当した。

基本的な手順は、まず友禅染下絵にトレーシングペーパーを乗せて部分ごとに分けて下図を作り、布を台に張って緒の部分をチャコペーパーで写し、刺繍を行うというものである。しかし、実際に友禅染の仕上がったものは、下絵とは多少変化があったため、刺繍の輪郭の印付けにも修正が必要であった。特に、絞り染を施した部分は下図との変化が大きかったため、厚紙で檜扇の形の型を作り、印を付けながら刺繍を行った。

図 14 復元模作（刺繍部分）

日本刺繍の糸は、菅とよぶ細い糸が 12 本集まって 1 本となっており、必要とされる太さに応じて、割ったり合わせたりして使用する。本復元模作においては、色糸の部分は、14 菅（1 本に 2 菅足している）の平糸と、8 菅の縒り糸（「4 菅あわせ」と呼ぶ。長い糸を真ん中で折って縒りをかけるので、倍の太さになる）を使用した。

図 15 復元模作（金糸部分）

まず模様の輪郭を後者の撚り糸で縫い、前者の平糸で中心に肉入れのための縫いを施す。それらの上から、前者の平糸で、縫いきりと呼ぶ方法で刺していく（図 14）。金糸の部分は、技術者が「本金 6 掛 3 回取」と表現する、6 掛とよぶ太さの金糸を 3 本使用する用法を用いる（図 15）。

技術者にとっての課題は、復元模作用の生地の扱いの難しさと、作品に施された刺繍の用法を想像しながら作業を計画する必要があったことである。模作用の生地の扱い方の難しさは、薄く織りの甘い生地であることと、前工程で生地がうけているダメージが多いことである。まず、台張りに際しては、友禅染の伸子張りで耳の部分が弱っていたため、木綿のテープを縫い付けて補強する必要があった。刺繍に際しては、針通りがよい一方、織りが甘く、前工程の絞り染で布が弱った所もあるため、糸の引き具合に特別の注意が必要であった。技術者が最も苦労したところは、檜扇の輪郭にあたる部分である。絞り染の輪郭の上に金糸駒縫を行い、台から外すと、部分ごとに生地の戻り方の違いがあり、金糸が緩んでよれてしまい（技術者は「びびれて」と表現する）やり直しの必要が生じた。

図 16
水浅葱地綸子柳に檜扇文振
復元部分模作（全図）

刺繍技法の判断の難しさは、皮肉にも、復元模作対象作品の保存状態の良さも原因であるといえる。対象作品の刺繍部分に糸が外れている部分がある場合や、生地に破れがあって刺繍部分の裏側が観察できる場合は、その部分から、刺繍の方法や、制作当初の色はどうであったかといった情報を得ることができる。しかし今回、対象作品はたいへん保存状態がよく、そのよ

うな情報を作品調査などでは得ることができなかったため、技術者が対象作品の現状をもとに計画する必要があった。肉入れなども、画像などから対象作品の刺繍部分の内部を想像して選択したものである。結果として、対象作品に近い、平糸の光沢が生きた仕上がりになった。

（4）装丁

加飾工程の終了後（図 16）、仕上げとして金箔と漆による表装を行う。

主な発表論文等

【国外研究成果発表[口頭発表]】

(1) 日時・会場

第 1 会場（平成 22 年 8 月 11ー13 日）

ポルトガル　レガレイラ宮殿（シントラ市）　来場者数約 330 名

第 2 会場（平成 22 年 8 月 14 日）

ポルトガル　エヴォラ大聖堂（エヴォラ市）来場者数約 830 名

図 17　日葡交流展ポスター

(2) 展示および口頭発表

本発表は、平成 22 年度に日本およびポルトガル政府の主導で行われた日本・ポルトガル修好 150 周年記念文化交流事業の一環として開催された「日葡文化交流展」において実施した。ポルトガル政府の協力により、会場は世界遺産に登録されているシントラ市内のレガイラ宮殿ならびにエヴォラ市内のエヴォラ大聖堂を使用し、多くの市民や欧州等からの観光客の来場を得た。

研究成果は、英語ならびにポルトガル語の 2 ヶ国語のポスターにより発表し、復元模作対象作品の実寸大写真や、復元の工程を説明する資料として、糊置き済み生地、地染済み生地、下絵などを展示した。また、あわせて、地染用の刷毛、筆、青花、筒皮、口金などの道具類を展示し、外国語圏においても視覚的に工程を理解できるよう工夫した（図 18）。

図 18　第 1 会場（レガイラ宮殿）

(3) ワークショップ

復元模作の加飾工程のうち、下絵（青花写し）の工程に関するワークショップを実施し、日本の伝統的染織技法に関する理解の助けとした。併せて、研究成果についての解説を実施した。（図 19）

図 19　ワークショップ実施風景
（レガイラ宮殿）

(4) 成果

入場者には、ポルトガル人のほか、欧州各国からの観光客が多くみられ、日本の伝統文化に対する関心の高さと、研究成果をより分かり易く、広く一般に伝えることの意義を再認識

する結果となった。また、復元模作、工程見本、道具をあわせて展示することで、日本の染織文化において模様染の代表的な技法の一つである友禅染の原理と、友禅染の復元的研究の重要性を、国外において効果的に伝えることができた。

【国内研究成果発表[口頭発表]】

(1) 日時・会場

平成 22 年 11 月 2～4 日

文化女子大学　文化ファッション研究機構における展示・研究成果発表

(2) 展示発表

研究成果をポスターにより発表し、ポルトガルにおける展示と同様に、復元模作対象作品の実寸大写真や、復元の工程を説明する資料として、糊置き済み生地、地染済み生地、下絵などを展示した。また、地染用の刷毛、筆、青花、筒皮、口金などの道具類を展示し、小袖の制作工程を視覚的に理解できるよう工夫した（図 20・21）。同展示期間は、文化女子大学文化祭開催期間にあたり、期間内を通じて来場者を得ることができた。

図 20 展示発表
（文化ファッション研究機構）

(3) ワークショップ

復元模作の加飾工程のうち、下絵（青花写し）と糸目糊置きの工程に関するワークショップを実施し、江戸時代中期から後期に行われた染織技法に関する参加者への理解の助けとした。併せて、研究成果についての解説を実施した。

図 21　展示発表
（文化ファッション研究機構）

(4) 成果

江戸時代中期から後期の小袖制作の実態について判明した成果を、復元模作や工程見本、道具などとあわせて展示することで、広く一般に効果的に発信することができたと思われる。このように、研究成果を分かり易く公開していくことは、日本の伝統的染織技法の保存・継承の動きを喚起する一助となり得ると考えられる。

参考文献

1. 文化学園服飾博物館（編）:「三井家のきもの」, p.39, 文化出版局(2006)